

平成29年度「学校における交流及び共同学習を通じた障害者理解(心のバリアフリー)の推進事業」成果報告書

団体名	大仙市教育委員会
-----	----------

## I 概要

### 1 事業の概要

- (1) 障がい者スポーツを介した「交流及び共同学習」の実施
  - ア 中学校と特別支援学校中学部との障がい者スポーツ交流
  - イ 小学校2校と特別支援学校小学部との障がい者スポーツ交流
  - ウ 中学校と障がい者バスケットボールクラブとの車椅子バスケットボールでの交流
- (2) パラリンピアンによる講演会の実施
  - ・ 中学校生徒、小学校児童、保護者、教職員に向けての講演会
- (3) 心のバリアフリー講演会・座談会
  - ・ 市内教職員、保護者、一般市民に向けての講演会・座談会の実施
- (4) 運営協議会の開催
  - ・ 大学教授も交えた協議会を年3回企画
- (5) 心のバリアフリー障がい者理解学習ガイドブックの作成
- (6) 心のバリアフリー障がい者理解教育全体計画の作成
- (7) 心のバリアフリー障がい者理解啓発プログラムの作成

### 2 事業の成果

- (1) 障がい者スポーツを介した「交流及び共同学習」の実施
  - ・ 小・中学校児童生徒、特別支援学校児童生徒、両者にとって有意義な活動となるように年間計画を立て、担当同士で児童生徒の情報を交換する機会をもつことができた。児童生徒は他者意識をもって事前学習に取り組み、相手のことを理解するために障がいについて調べたりスポーツの内容やルールを工夫したりした。このことによって、教師及び児童生徒が障がいや障がい者について理解を深めたことがアンケートに表れていた。
  - ・ 拠点地区小学校の事前学習では、市の社会福祉協議会の「バリアフリー体験授業」を活用したことで、市教委、学校及び社会福祉協議会が連携した活動をすることができた。
  - ・ 拠点地区中学校では、全職員が障がい者理解教育の目的や内容を共有するため、また障がい理解・障がい者理解の推進のために、校長のリーダーシップの下、大仙市教育委員会の特別支援教育担当指導主事を招き、職員研修会を開催した。
  - ・ 大仙市教育委員会が、秋田県車椅子バスケットボール協会と連携し、車いすバスケットボールの体験学習を企画・実施した。事後学習の感想には「障がいのある人を見る目が変わったような気がする。」とこれまでの障がい者に対する見方を変えたり、「(自分にはできないから)と挑戦から逃げてしまうのではなく、(自分ならこうすればできるかも)と挑戦することが大切。」など、自分の思いや考えのフレームを広げたりすることができたことが書かれてあった。児童生徒が多様な人の思いや考えを知ることができた。

(2) パラリンピアンによる講演会の実施

- ・ 盲目のパラリンピアン 竹内昌彦 氏による講演会を大仙市教育委員会が企画・実施した。事後学習での感想には、「目の不自由な人にどう接すればよいか分かった。」 「障がいのある人に自分から声をかけたい。」など障がいのある人に自ら関わろうとする意欲が表れていた。また、「信頼される人間になりたい。」「皆を笑顔にすることができるような人間になりたい。」など、自分自身の生き方について考えていることが表れていた。この講演会后、中学校の生徒会では、障がいのある人への募金活動を始めることになった。

(3) 心のバリアフリー講演会・座談会

- ・ 障がい者理解教育を専門とする大学准教授からの講演、インクルーシブ教育を研究している大学教授、障がいのある生徒の母親、市教育委員会担当での座談会を大仙市教育委員会が企画・実施した。市内、市外の教職員、保護者及び障がい者親の会や障がい者施設関係者及び一般参加者、約 250 人が参加した。市内教頭会研修会、地域特別支援教育研究会の冬季研修会ともタイアップしたこと、一般参加者にも広く呼びかけたことで、市及び教育委員会が障がい者理解を地域に広く推進していることを周知することができた。

(4) 心のバリアフリー運営協議会の開催

- ・ 大仙市教育委員会が運営協議会を開催した。インクルーシブ教育を研究している秋田大学教授をメンバーに加えたことで、他県や外国の障がい者理解（心のバリアフリー）教育の現状や、取組について情報を得ることができたとともに、事業に生かすことができた。

(5) 心のバリアフリー障がい者理解学習リーフレットの作成

- ・ 大仙市教育委員会が関係機関と連携し作成した。拠点地区以外の県内特別支援学校の出前授業の取組、地域の福祉施設やNPO法人の取組を知ることができたり、社会福祉協議会や地方法務局人権擁護委員と協力した活動につながった。

(6) 心のバリアフリー障がい者理解教育全体計画の作成

- ・ アンケート結果において、拠点校は「障がいのある人が身近に生活していることを知っている」「障がいのある人と自分との共通点について知っている」「障がいのある人と自分との違いについて知っている」の割合が高まった。その要因として「障がい者理解教育目標」と「目指す児童像」を視覚化・共有化したことが挙げられる。ねらいが明確化されたことで、児童も教師も体験だけではない目標の達成を目指した有意義な活動ができたと考えられる。

(7) 心のバリアフリー障がい者理解啓発プログラムの作成

- ・ プログラム作成に当たり、同県他市の障がい者教育先進校を参観することができた。参観者は大仙市の教育支援委員も兼ねていることから、来年度以降は障がい者理解教育の出前授業担当者として、各小・中学校での授業を行ってもらう予定である。実際の授業を参観したことで全員が授業のイメージをもつことができた。また、県内各特別支援学校の地域支援部担当の協力や参考資料をいただいたりすることができた。

### 3 事業の課題とその解決のために必要な取組

- ・教職員アンケート、一般の方のアンケートから、障がい者理解の推進には「大人の理解の方が必要」「高齢者の理解が必要」という意見が少なくなかった。今後の講演会は、市の広報紙やホームページ等で広く呼び掛けていき、幅広い世代の理解を推進していく必要がある。
- ・拠点地区の特別支援学校のアンケート結果において「心のバリアフリーという言葉聞いたことがない」と回答した保護者が半数以上いることが分かった。拠点地区以外の教職員や保護者はさらに割合が高いことも想像できる。大仙市教育委員会は、各研修会や学校訪問を通じて、「心のバリアフリー障がい者理解学習リーフレット」「心のバリアフリー障がい者理解啓発プログラム」の利用を勧めていく。また、学校通信及び学級通信等を利用し、各校における交流及び共同学習の内容を保護者等にも積極的に伝えていくことを話していくことが必要である。
- ・保護者アンケート「障がいや障がいのある方について話題にする内容」について、自校の特別支援学級児童生徒について触れていた回答は、ほぼゼロであった。大仙市教育委員会として研修会や学校訪問等でこの事実を伝えるとともに、これまで積極的に行っている小・中学校の通常学級の児童生徒と特別支援学級の児童生徒との交流及び共同学習が、児童生徒の心のバリアフリーを育むことをあらゆる場面で伝えていくことが必要である。
- ・障がいのある子どもの母親への取材や特別支援学校児童生徒の保護者アンケートから「かわいそう」という発言に対して差別や偏見を強く感じているが分かった。小・中学校の児童生徒アンケートによると障がいがあることを「かわいそう」と考えている割合は、障がい者理解学習の回数が少ないほど高かった。大仙市教育委員会として研修会や学校訪問等でこの事実を伝えるとともに、交流及び共同学習や障がい者理解学習が児童生徒の心のバリアフリーを育むことをあらゆる場面で伝えていくことが必要である。
- ・「心のバリアフリー障がい者理解啓発プログラム」の素案を大仙市教育委員会が作成。拠点地区特別支援学校の児童生徒の理解を推進するためのプログラムも大仙市教育委員会担当指導主事が作成したが、そのプログラムを各小・中学校の教諭が自由に使うことは、特別支援学校児童生徒のプライバシー保護の関係で難しいことが分かった。特別支援学校は広域から児童生徒が通学しており、障がい者理解学習の際には、授業を行う学級の児童生徒だけでなく兄弟や親類への偏見や差別等を考慮する必要がある。よって、特別支援学校の地区小・中学校に対する理解促進については特別支援学校が主体になって行うことが望ましい。市教育委員会は、特別支援学校に対してセンター的機能を十分に発揮してもらうように積極的に働きかけるとともに心のバリアフリー推進のために協力していく必要がある。

※大仙市では、障害を「障がい」と表すことを決めています。

平成29年度「学校における交流及び共同学習を通じた障害者理解(心のバリアフリー)の推進事業」成果報告書

II 詳細報告

1. モデル地域の構成

※記入する学校数・学校種に応じて適宜欄の追加・削除を行うこと。

(1) 構成する市区町村等数 ( )市 ( )区 ( )町 ( )村

モデル地域の内訳 (学校設置者別)	学校数 (学校種別ごと)
大仙市	小学校 21 校、中学校 11 校

(2) 全学校・園数(平成30年2月15日現在) ※国公私計

幼稚園	小学校	中学校	義務教育学校	高等学校	中等教育学校	特別支援学校	合計
園	21 校	11 校	校	校	校	校	32 校・園

2. モデル地域(対象校)の概要

※記入する学校数・学校種に応じて適宜欄の追加・削除を行うこと。

(1) 対象校の概要(平成30年2月1日現在)

学校名	幼児児童生徒数	教職員数
大仙市立大曲西中学校	72	15
大仙市立大川西根小学校	78	11
大仙市立内小友小学校	98	14

(幼・小・中・高等学校等) 学校名：大仙市立大曲西中学校

	第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年	
	児童生徒数	学級数										
通常の学級	27	1	16	1	25	1						
通級による指導の対象者数												
特別支援学級	2	1	1	1	1	1						

特別支援学級の対象としている障害種：知的障害(1年、2年) 自閉症・情緒障害(3年)

(幼・小・中・高等学校等) 学校名：大仙市立大川西根小学校

	第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年	
	児童生徒数	学級数										
通常の学級	10	1	11	1	20	1	12	1	12	1	13	1
通級による指導の対象者数									2			
特別支援学級					1	1						

特別支援学級の対象としている障害種：知的障害

通級による指導の対象としている障害種：自閉症スペクトラム、ADHD

(幼・小・中・高等学校等) 学校名：大仙市立内小友小学校

	第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年	
	児童生徒数	学級数										
通常の学級	14	1	21	1	11	1	19	1	22	1	10	1
通級による指導の対象者数												
特別支援学級							1	1				

特別支援学級の対象としている障害種：知的障害

(特別支援学校) 学校名：秋田県立大曲支援学校

	幼児児童生徒数					計
	幼稚部	小学部	中学部	高等部		
				本科	専攻科	
視覚障害						
聴覚障害						
知的障害		13	29	59		101
肢体不自由						
病弱						
重複障害※		17	8	8		33
計		30	37	67		134

※重複障害は、上記5障害の外数を記入。

## (2) モデル地域(対象校)の特色

- ・モデル地域の小・中学校3校は市内で唯一、モデル地域の秋田県立大曲支援学校との交流活動を地域の特色ある教育活動の一つとして継続的に行っている。
- ・大仙市立内小友小学校は、毎年2回、全校児童の交流及び1~6年生各学年の交流を続けている。1回目は内小友小学校全児童が大曲支援学校を訪問し、2回目は大曲支援学校の小学部全児童が内小友小学校を訪問している。この「ハローの会」と呼ばれる交流及び共同学習は、今年で23年目を迎えた。
- ・大仙市立大川西根小学校は、毎年大曲支援学校の夏祭りに招待を受けていた学校である。そのお礼として、学校の特色である全校音楽劇の地域発表会に大曲支援学校の児童生徒を保護者や地域の方々と共に招待してきた。しかし児童数の減少により、全校音楽劇の完成に時間がかかるようになったため、地域発表会を今年度から取りやめることとなった。
- ・2校の小学校とも、児童一人一人が学びの充実感を味わうことができる授業づくりのための取組として、「ユニバーサルデザインの視点」による校内環境づくりや授業づくりを研究の一つとしている。
- ・大仙市立大曲西中学校は、2年生が大曲支援学校を訪問し中学部生徒と作業学習での交流学習を行い、3年生は大曲支援学校中学部生徒の訪問を受けゲームやスポーツ交流を行っている。

### 3. 事業内容

#### (1) 教育委員会のモデル地域（対象校）への支援に関わる取組内容

##### ア 障がい者スポーツを介した「交流及び共同学習」の実施

###### (ア) 中学校と秋田県立大曲支援学校中学部との障がい者スポーツ交流

- ・大仙市教育委員会が中学校と特別支援学校に出向き、事業内容について説明。今年度はスポーツ活動での交流及び共同学習を行うことについてお願いした。中学校側では、事前学習を大切にし、これまで特別支援学校側で行ってきた企画作成を中学生が自ら行うことに挑戦した。
- ・活動日当日は大仙市教育委員会担当者も参加し、計画や運営、生徒や教師の様子について指導・助言を行った。また、感想文等のまとめを大仙市教育委員会が行い、生徒の学習状況についても指導・助言を行った。

###### (イ) 小学校と秋田県立大曲支援学校小学部との障がい者スポーツ交流

- ・大仙市教育委員会がそれぞれの小学校と特別支援学校に出向き、事業内容について説明。  
今年度はスポーツ活動での交流及び共同学習を行うことについてお願いした。特に大仙市立大川西根小学校においては、今年度1回の交流のみを予定していたため、日程や内容の調整について特別支援学校と連絡を取り合った。
- ・それぞれの活動日当日は大仙市教育委員会も参加し、計画や運営、児童や教師の様子について指導・助言を行った。また、感想文等のまとめを大仙市教育委員会で行い、生徒の学習状況についても指導・助言を行った。

###### (ウ) 中学校と障がい者バスケットボールクラブとの車いすバスケットボールでの交流

- ・大仙市教育委員会が企画・準備・運営を行った。交流学习内容については、バスケットボールクラブの事務局が担当した。
- ・活動日当日は大仙市教育委員会担当も参加し、計画や運営、児童や教師の様子について指導・助言を行った。また、感想文等のまとめを大仙市教育委員会で行い、生徒の学習状況についても指導・助言を行った。

##### イ パラリンピアンによる講演会の実施

- ・大仙市教育委員会が企画・運営した。当初は、拠点校の中学校生徒と教職員のための講演会とする予定であったが、心のバリアフリー運営協議会において小学校の上学年にも参加させた方がよいのではないかという意見が出て、拠点地区二つの小学校の4～6年生児童と教職員も参加することとなった。
- ・活動日当日は大仙市教育委員会担当も参加し、児童や教師の様子について指導・助言を行った。  
また、感想文等のまとめを大仙市教育委員会で行い、生徒の学習状況についても指導・助言を行った。

##### ウ 心のバリアフリー講演会・座談会

- ・大仙市教育委員会が企画・準備・運営した。市の教頭会研修会や地域の特別支援教育研究会冬季研修会とタイアップし、各市町村教育委員会、県教育委員会、医療関係機関、教育関係機関、福祉関係機関、障がい者団体、NPO法人、慈善団体等へも告知し、県内に広く周知した。

- ・参加者アンケートのまとめを大仙市教育委員会で行った。

#### エ 心のバリアフリー運営協議会の開催

- ・大仙市教育委員会が会を発足、企画・運営。インクルーシブ教育を研究している大学教授をメンバーに加えた。

#### オ 心のバリアフリー障がい者理解学習リーフレットの作成

- ・大仙市教育委員会が企画・作成。学校が取り組みやすいよう各関係機関と連携し、内容を検討した。大仙市内の小・中学校他、各関係機関に配布予定である。

#### カ 心のバリアフリー障がい者理解教育全体計画の作成

- ・大仙市教育委員会が小学校用・中学校用素案を作成。大仙市教育委員会共有フォルダ内「SENフォルダ」にファイルをおき、各小・中学校が児童生徒の実態に合わせて使用できるようにした。

#### キ 心のバリアフリー障がい者理解啓発プログラムの作成

- ・大仙市教育委員会が企画し、拠点校、県内各特別支援学校及び市内通級指導教室担当者等の協力を得て素案を作成。大仙市教育委員会共有フォルダ内「SENフォルダ」にファイルをおき、どの学校も実態に合わせて使用できるようにした。

### (2) モデル地域（対象校）における、交流及び共同学習の取組内容

#### ア 障がい者スポーツを介した「交流及び共同学習」の実施

##### (ア) 中学校と特別大曲支援学校中学部との障がい者スポーツ交流

- ◇ねらい
  - ・障がいのない生徒が障がいのある生徒と共に実際に障がい者スポーツを体験することで、障がい者と障がいに対する理解を深め、人間の多様性の尊重や豊かな社会性の育成につなげる。
  - ・障がい者スポーツに取り組むことにより、体を動かす喜びや人と人との交流することによる一体感を共有し、障がい者スポーツをより身近なものとして感じ、今後の更なる交流につなげる。
- ◇日時
  - 3年生 平成29年 9月27日（水） 10:00～12:00
  - 2年生 平成29年 11月22日（木） 10:00～12:00
- ◇場所 大曲西中学校体育館
- ◇交流対象 秋田県立大曲支援学校中学部（生徒35名）  
大仙市立大曲西中学校（3年生26名、2年生17名）
- ◇事前準備
  - 7月12日（水）総合的な学習の時間 2時間
    - ・心のバリアフリーについて調べる。
    - ・体験活動→アイマスク、車いす、白杖体験をする。
  - 7月19日（水）総合的な学習の時間 2時間
    - ・特別支援学校とスポーツを通して交流する種目を考える。
    - ・考えた種目を作成・準備し、みんなで体験をし、改善点を探る。
  - 7月26日（水）
    - ・特別支援学校との打ち合わせ

- ・生徒が作った種目を提示し、アドバイスをもらう。
- ◇日 程 (9月27日、11月22日ともに)
  - 9:30 特別支援学校からバス出発
  - 9:40 大曲西中学校到着
  - 10:00 交流会開始式(司会:大曲西中学校)
    - ①開会の言葉 ②中学生歓迎の言葉
  - 10:15 競技開始
    - ・競技開始の前に4グループ内で自己紹介
    - ①全員での交流:キンボールバレー(4グループ)
    - ②中学生スタッフ:ボール入れゲーム(2か所)
      - :キックボール的当てゲーム(2か所)
    - ③選抜ゲーム:綱引き(各校10人選抜での対決)
      - :大縄跳び(各校5人選抜で一緒に)
  - 11:35 交流会閉会式(司会:大曲西中学校)
    - ①開会の言葉
    - ②感想発表(特別支援学校2名、中学校2名)
    - ③閉会の言葉
  - 12:00 中学校からバス出発(中学生見送り)



【大曲支援学校中学部1~3年生と大曲西中学校3年生とのキンボール】

(イ) 小学校と特別支援学校小学部との障がい者スポーツ交流

<大仙市立大川西根小学校 交流及び共同学習>

- ◇ねらい
  - ・自分たちで出店の内容を考えたり、準備をしたりすることを通して、夏祭りへの意欲や期待感をもつ。
  - ・友達と協力して出店の準備をしたり、一緒に出店巡りをしたりすることを通して、同世代の人に自分の気持ちを表現したり、コミュニケーションを深める機会とする。
  - ・大曲婦人会の方々にお神輿担ぎやダンスを発表して頑張りを認めてもらったり、一緒に店番を行ったりすることを通して関わりながら楽しく交流する。

◇日 時 平成29年6月30日(金) 9:25~11:20・・・事前学習

平成29年7月13日(木) 9:20~11:10・・・当日

- ◇場所 大曲支援学校 体育館  
◇参加者 大曲支援学校小学部児童 31名・職員27名  
大川西根小学校2・3年生 30名・職員4名  
大曲婦人会の方々 7名

◇日程  
(6月30日)

- 9:25~ ・大曲支援学校到着  
9:40~ ・ペアの学年ごとに整列  
・各学年で交流活動(45分間)  
9:45~ ・始めの会(司会 特別支援学校5年)  
①始めの言葉(特別支援学校5年)  
②児童代表あいさつ(特別支援学校4年)  
③なかよしタイム  
・みんなで踊ろう「みてみてこっちっち」  
・なかよく走ろう花火リレー  
④終わりの言葉(特別支援学校4年)  
10:10~ ・各教室へ移動  
・出店準備  
1年:すずしい風や 2年:変身や 3年鬼の福笑いや  
4年:魚つりや 5-1:お化けや  
5-2+6年:くじや  
11:00~ ・終わりの会(司会:特別支援学校5年)  
①始めの言葉(特別支援学校5年)  
②感想発表(大川西根小、特別支援学校5年)  
③みんなで歌おう「ハローの会」の歌「子どもの世界」  
(内小友小から)  
④終わりの言葉(特別支援学校5年)

(7月13日)

- 9:20~ ・大曲支援学校到着 体育館整列  
9:35~ ・お神輿入場  
9:45~ ・始めの会(司会 特別支援学校4年)  
①始めの言葉(特別支援学校5年)  
②児童代表あいさつ(特別支援学校6年、5年)  
③校長先生のお話  
④婦人会のみなさんから  
⑤大川西根小学校のみなさんから  
⑥出店の紹介  
⑦終わりの言葉(特別支援学校5年)  
10:05~ ・出店巡り  
1年:すずしい風や 2年:変身や 3年鬼の福笑いや  
4年:魚つりや 5-1:お化けや  
5-2+6年:くじや  
10:55~ ・終わりの会(司会:特別支援学校4年)

- ① 始めの言葉（特別支援学校 5年）
- ② 感想発表（大川西根小、婦人会、特別支援学校 5年）
- ③ 記念撮影
- ④ 終わりの言葉（特別支援学校 5年）



【通常学校児童と特別支援学校児童がペアになった花火リレー】

<大仙市立内小友小学校 交流及び共同学習>

○ハローの会Ⅰ実施計画 平成29年6月2日（金）

◇ねらい 大曲支援学校との交流を通して、児童がお互いを認め合い、協力し合う温かな人間関係を築くように努め、共に生きていこうという思いやりの心を育む。

◇キャリア教育の視点<1 みんなと協力する力>

<1・2年>

大曲支援学校の（初めて会う）友だちと、仲良くなろうという気持ちをもって楽しく活動することができる。

<3・4年>

大曲支援学校の友だちのペースを考え、友だちを思いやりながら楽しく活動することができる。

<5・6年>

- ・大曲支援学校の友だちの障がいの様子を思い起こし、どんな関わり方をするといいかを考えることができる。
- ・大曲支援学校の友達に自分から関わりをもとうと努め楽しく活動することができる。

◇日 時 平成29年6月2日（金） 10:10～12:10

◇場 所 秋田県立大曲支援学校

◇時 数 当日・・・交流活動と事前として2時間

1・2年生 生活2時間、3～6年生 総合2時間

※移動・事後の指導を含む（振り返りカード・礼状書き等）

◇日 程

9:10 内小友小出発

10:10 特別支援学校到着

10:30 全体の会（よろしくねの会）

司会（大曲支援学校 6年）

- ① はじめの言葉（大曲支援学校 5年）
- ② 歓迎の言葉（大曲支援学校 6年）
- ③ みんなで歌おう「ハローの会の歌」「子どものせかい」
- ④ みんなで踊ろう「みてみてこっちっち」
- ⑤ 校長先生の話（大曲支援学校校長 内小友小校長）
- ⑥ 終わりの言葉（大曲支援学校 5年）

10:50 学年ごとに交流（※各学年で終わりの会を行う）  
11:45 特別支援学校出発  
11:55 内小友小到着（※時間を見てふり返り お礼の手紙等）

◇参加者および交通手段 全校児童98名 引率職員8名

◇交流内容（全体の会の後、学年ごとに交流）

学年	活 動 内 容	場 所
1年	自己紹介 校内外オリエンテーリング	教室 特別支援学校内外
2年	ロンドン橋を歌おう じゃんけん列車 インタビュー	多目的室
3年	自己紹介 ダンスをおどろう ピンたおしゲーム	寄宿舎の プレイルーム
4年	ふうせんバレー ふうせん運びゲーム	体育館
5年	ボールおくりゲーム フルーツバスケット（カード作り）	体育館
6年	手話で自己紹介 洗濯物干しリレー みんなで歌おう（世界中の子どもたちが）	6年教室

○ハローの会Ⅱ実施計画 平成29年11月1日（水）

◇ねらい 大曲支援学校との交流を通して、児童がお互いを認め合い、協力し合う温かな人間関係を築くように努め、共に生きていこうという思いやりの心を育む。

◇キャリア教育の視点＜1みんなと協力する力＞

<1・2年>

- ・大曲支援学校の友だちに自分から近づき、仲良くなろうという気持ちで活動することができる。
- ・友だちと一緒に楽しく過ごせる活動を考え、準備することができる。

<3・4年>

- ・大曲支援学校の友だちに自分から声をかけ、友だちを思いやりながら活動することができる。
- ・友だちのペースを考え、友だちと一緒に楽しめる活動を考え準備することができる。

<5・6年>

- ・大曲支援学校の友達に自分から関わりをもとうと努め、楽しく活動することができる。
- ・友だちの障がいの様子を思い起こし、友だちを思いやりながら、一緒に楽しめる活動を考え準備することができる。

◇日 時 平成29年11月1日(水) 9:30~12:10

◇場 所 大仙市立内小友小学校

◇時 数 交流活動(1・2年…生活 3年以上…総合)

5時間扱い(当日の交流・2時間、事前の準備・2時間、事後の指導・1時間)

◇参加者 大曲支援学校 児 童 31名 職 員 26名  
内小友小学校 児 童 96名 職 員 11名

◇日 程

- 9:30~ ・学年ごとに準備
- 9:45~ ・玄関で出迎え
- ・各学年で交流活動(45分間)
- 10:30~10:45 ・休憩、学年ごとに体育館へ移動
- 10:45~11:15 またねの会(全体会)
- 司会(内小友小6年児童)
- ①はじめのことば(内小友小6年児童)
- ②内小友小学校の先生のお話、大曲支援学校の校長先生のお話
- ③みんなで歌おう「ハローの会」の歌「子どもの世界」(内小から)
- ④みんなで踊ろう ダンス(大曲支援から)
- ⑤感想発表(内小友小・大曲支援 各2名)
- ⑥おわりのことば(内小友小6年児童)
- 11:15~11:25 移動 見送り
- 11:25~ 大曲支援学校1~6年生児童出発
- 11:30~ 内小友小の子供達 片付け・振り返り(各学級)

各学年の交流活動(45分間)

学年	場 所	◎テ ー マ
		○ね ら い
		・活 動 内 容
1年	1年教室	◎なかよく たのしく
		○ゲームを一緒に楽しみ、なかよく活動できる。 ・学校たんけん ・イスとりゲーム
2年	2年教室	◎なかよくつくって たのしくあそぼう
		○遊び道具を一緒に作ったり、楽しんだりして仲良く活動できる。 ・グループで輪づくり ・ペットボール輪投げ
3年	体育館	◎仲良く作ろう、楽しく遊ぼう

	(前)	○特別支援学校の友達に自分から関わって活動することができる。 ・ベットボトルボウリング ・グループ工作（プレゼント）
4年	体育館 (後)	◎スポーツでなかよく交流しよう ○特別支援学校の友達のことを考えて、進んで関わるすることができる。 ・シュートゲーム（玉入れ） ・ベットボトルボウリング
5年	図工室	◎みんなで仲良く遊ぼう ○進んで関わり、相手を思いやることでつながりを深めることができる。 ・ボール運びリレー ・転がしドッチボール
6年	6年教室 もも組	◎みんなで思い出を作ろう ○友達を思いやり、進んで関わることで、つながりを深めることができる。 ・転がしの当てゲーム ・風船バレーボール



【風船バレーボール】



【ピン倒しゲーム】

(ウ) 中学校と障がい者バスケットボールクラブとの車椅子バスケットボールでの交流

〈車いすバスケットボール体験教室〉

◇ねらい

- ・車いすバスケットボールの体験を通して、生徒や教職員・保護者の障がい理解や障がい者理解の推進を図る。
- ・車いすバスケットボールの体験を通して、生徒や教職員・保護者の障がい者スポーツの理解推進を図る。

◇日 時 平成29年9月14日（木）13:30～15:30

◇場 所 大仙市立大曲西中学校体育館

◇参加者 ・大曲西中学校3年生 26名、大曲西中学校職員有志7名  
・秋田県車椅子バスケットボールクラブ5名  
・大仙市教育委員会4名

◇日 程

- ～ 13 : 00 車いす搬入（教育委員会、大曲西中学校職員）
- 13 : 00 秋田県車椅子バスケットボールクラブ5名到着。事前準備。
- 13 : 30 1 開会のあいさつ（司会 大仙市教育委員会）
- 13 : 33 2 指導者自己紹介（バスケットボールクラブ）
- 13 : 40 3 車いすの操作体験（司会 バスケットボールクラブ代表）
- 14 : 30 4 ミニゲーム（司会 バスケットボールクラブ代表）
- 15 : 10 5 質問コーナー（西中生から、参加者から）
- 15 : 20 6 参加者からの感想発表（西中生、バスケットボールクラブ）
- 15 : 25 7 代表者への花束贈呈（西中生代表からクラブ代表へ）
- 15 : 27 8 大曲西中学校 校長先生 あいさつ
- 15 : 29 9 閉会のあいさつ（教育委員会）



【車いすの動かし方を教えてもらう生徒】



【車いすバスケット ミニゲーム】

イ パラリンピアンによる講演会の実施

◇ねらい 小学校中学年：障がいを身近なこととして考え、相手の気持ちを考えて行動しようとする態度を育てる。

小学校高学年：障がいのある人や高齢者の気持ちにより添い、自分でできることを考えて行動しようとする態度を育てる。

中学校：障がいの特性や障がいのある人の立場を理解し、共により良く生活するための方法や工夫について考え、行動しようとする態度を育てる。

◇日 時 平成30年1月16日（火） 13 : 30～15 : 00

◇場 所 大曲西中学校 体育館

◇参 加 大仙市立大曲西中学校 生徒1年生～3年生（72名）、教職員、保護者  
大仙市立内小友小学校 児童4年生～6年生（50名）、引率教職員  
大仙市立大川西根小学校 児童4年生～6年生（37名）、引率教職員

◇日 程

- 13 : 00 講師到着
- 13 : 00 内小友・大川西根小学校からバス発車
- 13 : 10 バスが大曲西中学校に到着→体育館へ移動
- 13 : 30 開会行事（司会 教育委員会）
  - ・会場校校長（大曲西中学校校長） あいさつ
  - ・講師紹介（教育委員会）

- 13:40 講演 「私の歩んだ道——見えないから見えたもの」  
竹内 昌彦 氏（岡山ライトハウス理事長）
- 14:50 閉会行事（司会 教育委員会）  
・花束贈呈：大曲西中学校生徒代表2名  
（1名は感想を交えた感謝の言葉を話す。もう一名が花束贈呈。）
- 15:30 大曲西中学校からバス発車



【東京パラリンピック金メダリスト 竹内 昌彦 氏の講演会】

#### ウ 心のバリアフリー講演会・座談会

##### ◇趣 旨

障がい理解教育や障がい者理解教育に関する講話や対談を通して、障がいのある人と障がいのない人が互いに理解し合うための機会を提供するとともに、互いの個性や多様性を認め合える共生社会を形成するために必要なことについて考える機会を提供する。

◇主 催 大仙市教育委員会

◇期 日 平成30年1月10日（水）

◇会 場 大仙市大曲市民会館小ホール（秋田県大仙市大曲日の出町2丁目6-50）

◇参加者 教職員及び保護者、関係機関職員、一般参加者等

##### ◇日 程

9:00～ 9:20 受付

9:20～ 9:30 開会行事

9:30～ 11:00 講演「共生社会に向けた障がい者理解教育」

講師 北海道教育大学函館校准教授 細谷 一博 氏

11:10～ 11:50 座談会

「障がい理解、障がい者理解が

わたしたちにもたらすもの」

北海道教育大学函館校准教授 細谷 一博 氏

秋田大学 教授 藤井慶博 氏

特別支援学校卒業生 藤原玲子 氏（欠席）

特別支援学校在校生保護者 渡部加代子 氏

大仙市教育委員会 指導主事 櫻田 武

11:55～ 12:00 閉会行事

## エ 運営協議会の開催

### 〈第1回心のバリアフリー運営協議会〉

日時：平成29年5月1日（月）15：30～16：30

場所：大曲西中学校

〈会次第〉

- 1 開会
- 2 大仙市教育委員会あいさつ
- 3 協議会委員紹介
- 4 文部科学省心のBF事業趣旨について
- 5 心のBF運営協議会長の選出
- 6 協議（進行：運営協議会長）
  - (1) 大仙市心のBF事業 目的・目標について
  - (2) 年間活動計画について
  - (3) その他
- 7 閉会

### 〈第2回 心のバリアフリー運営協議会〉

日時：平成29年10月23日（月）10：00～11：30

場所：大曲西中学校

〈会次第〉

- 1 開会
- 2 大仙市教育委員会あいさつ
- 3 協議（進行：運営協議会長）
  - (1) 今後の事業計画について
  - (2) これまでの事業を振り返って
  - (3) アンケートの結果について
  - (4) その他
- 4 閉会

### 〈第3回 心のバリアフリー運営協議会〉

日時：平成30年2月26日（月）10：00～11：30

場所：大曲西中学校

〈会次第〉

- 1 開会
- 2 大仙市教育委員会あいさつ
- 3 協議（進行：運営協議会長）
  - (1) これまでの事業を振り返って
  - (2) アンケートの結果について
  - (3) 今後の事業計画について
  - (4) その他
- 4 閉会

## オ 心のバリアフリー 障がい者理解学習リーフレットの作成

（別添 心のバリアフリー 障がい者理解学習リーフレット）

#### カ 心のバリアフリー 障がい者理解教育全体計画の作成

(別添 心のバリアフリー 障がい者理解教育全体計画)

#### ク 心のバリアフリー啓発教材の作成

(別添 心のバリアフリー 障がい者理解啓発プログラム)

### 4. 成果と課題

#### (ア) 障がい者スポーツを介した「交流及び共同学習」の実施

- (ア) 中学校と特別支援学校中学部との障がい者スポーツ交流
- (イ) 小学校2校と特別支援学校小学部との障がい者スポーツ交流
- (ウ) 中学校と障がい者バスケットボールクラブとの車いすバスケットボール交流

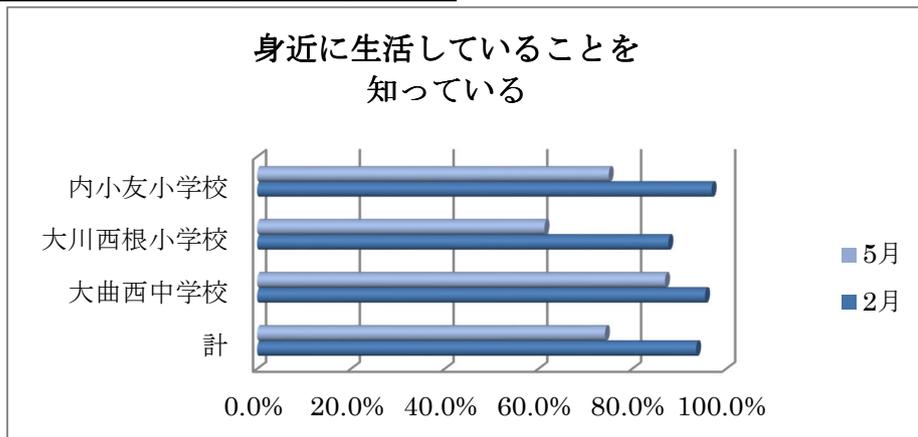
#### (成果)

○拠点校の3校では、事業前と比較して、障がい者への理解が深まった。アンケートの結果によると「障がいのある人が身近に生活していることを知っている」「障がいのある人と自分との共通点について知っている」「障がいのある人と自分との違いについて知っている」と回答した割合が高まっている。

#### (アンケート結果からみる成果について)

【あなたは、大曲支援学校という学校を知っていますか（小学校1～2年生）あなたは、障がいのある人が身近に生活していることを知っていますか。（小学校3年生～中学校3年生）】

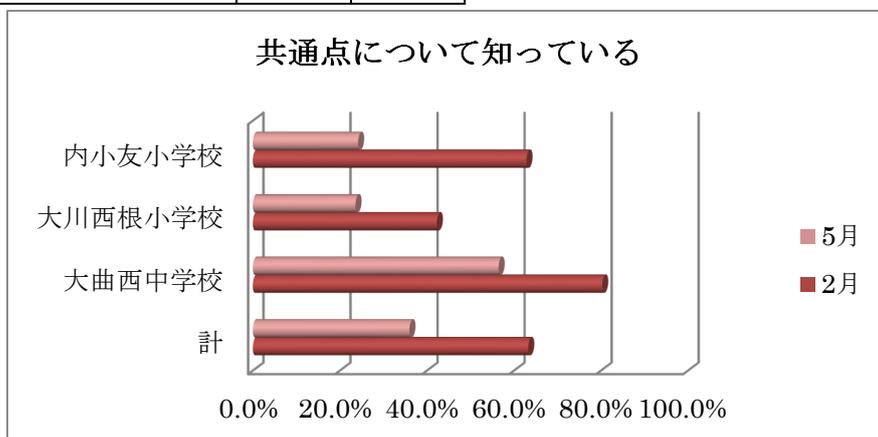
知っている	5月	2月	
内小友小学校	75.0%	96.9%	+21.9p
大川西根小学校	61.3%	87.7%	+26.4p
大曲西中学校	87.0%	95.5%	+ 8.5p
計	74.2%	93.6%	+19.4p



○拠点校3校とも事業前と比較して、「障がいのある人が身近に生活している」ことを理解することができた。大仙市の拠点校以外の小・中学校抽出校のアンケート結果は「知っている」と答えた児童生徒が70.4%で、拠点校が23.2p上回っている。また、他市の障がい者理解教育先進校（小学校）の抽出クラスアンケート結果97.0%とほぼ同じ割合となっている。

【あなたは、障がいのある人と自分との共通点について知っていますか。】

知っている	5月	2月	
内小友小学校	24.2%	62.9%	+38.7p
大川西根小学校	23.6%	42.3%	+18.7p
大曲西中学校	56.5%	80.3%	+23.8p
計	36.0%	63.3%	+27.3p



○拠点校3校とも事業前と比較して、「障がいのある人と自分との共通点について知る」ことができた。大仙市の拠点校以外の小・中学校抽出校のアンケート結果は48.0%の児童生徒が「知っている」と答えており、拠点校が15.3p上回っている。ただし、他市の障がい者理解教育先進校（小学校）の抽出クラスアンケート結果は97.0%であり、拠点校は33.7p下回っている。

○本質問が、他の質問より高い伸び率を表しているのは、最初「障がいのある人との共通点」を知るという視点が、児童生徒にも教師にもなく、この事業によって目指す児童像が視覚化・共有化されたためと思われる。

（課題）

△大川西根小学校が活動後も5割を下回っているのは、交流及び共同学習を行ったのが、2～3年生に限定されていることと、活動の企画が全て特別支援学校であり、招待される側であったことが推測される。

△他市障がい者理解教育先進校は、毎年近隣の特別支援学校が主体となり、児童の発達段階に応じて、全学年に障がい者理解出前授業を行っている。大仙市においても障がい者理解教育プログラムを作成し、特別支援学校の教諭や通級指導教室担当、市教育委員会指導主事が出前授業を行うことで、学校側に負担をかけることなく、障がい者理解を推進できるものと思われる。

【あなたは、障がいのある人と自分との違いについて知っていますか。】

知っている	5月	2月	
内小友小学校	67.7%	77.4%	+9.7p
大川西根小学校	43.6%	59.6%	+16.0p
大曲西中学校	79.7%	95.5%	+15.8p
計	65.1%	78.9%	+13.8p



(課題)

△講演講師を決定するのに非常に難儀した。今年度の講師決定は違うが、「一般社団法人 日本パラリンピアンズ協会」と連絡が取れたので、来年度以降はスムーズな講師決定ができるものと思われる。

△講演会の時期や場所の関係で、大曲西中学校の保護者にしか参加希望の有無を確認しなかった。内小友小学校と大川西根小学校の保護者や他の教職員、一般の方から「聞きたかった」という声を多くいただいた。市民が広く参加できるような場所や時期を考慮したい。

## ウ 心のバリアフリー講演会・座談会

(成果)

○大仙市教頭会の研修会と兼ねたことにより、大仙市内の全小・中学校の管理職が参加した。また、大仙市PTA連合会母親委員会学習会と兼ねたことにより、PTA連合会長や母親委員も参加した。管理職の参加やPTA連合会の役員の出席は、障がい者理解の推進に大いに役立つものと期待できる。

○参加者のアンケートによると、「当事者の母親の生の声が聞いて良かった。」「障がいのあるお子さんの保護者のお話は心に響きました。」「当事者の母親の話聞いて他者理解の大切さについて考えさせられた。」など、当事者が参加したことに対する反響が多かった。また、「話を聞いて他者理解の大切さについて考えさせられた。」「特別支援教育、障がい者理解教育に対して理解が深まった。」「市の取組を知る良い機会となった。」等、「心のバリアフリー」という言葉と市や教育委員会が障がい者理解を推進していることを地域に広めることができた。

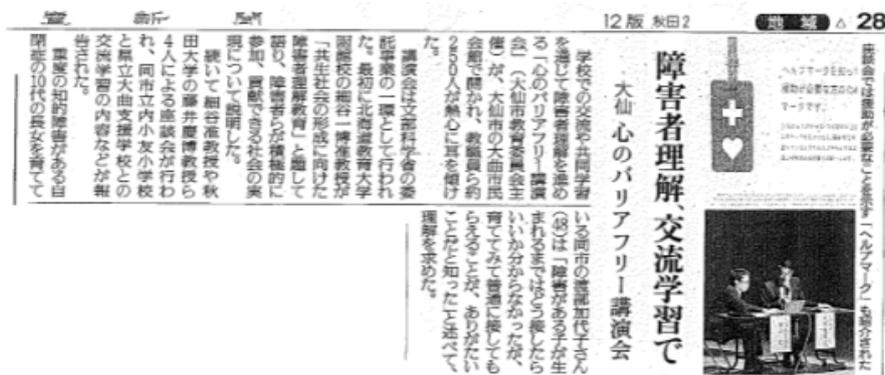


【細谷 一博氏の講演会】



【座談会】

○講師を探す作業の中で、障がい者理解教育やインクルーシブ教育を研究している大学教授や国立特別支援教育研究所研究員、同じ事業に参加している秋田大学附属特別支援学校や埼玉県立入間わかくさ高等特別支援学校から情報を得られたことによって、本市の事業内容が深まったと感じている。



【読売新聞掲載の新聞記事（平成 30 年 1 月 18 日付け）】

（課題）

△大曲支援学校保護者のアンケートにおいて、「通常学校の先生方の理解が必要」という意見が少数ではあるが見られた。今回の通常学級の先生方の参加者は、大仙市の小・中学校教職員の約 10%であり、今後も通常学校の先生方への啓発を続けていきたい。また、「大人の理解が必要」「高齢者の理解が必要」という意見が、12.7%あった。本市の 65 歳以上の高齢者人口の割合は 35.3%（H29.3 月末 市調査）であることもふまえ、心のバリアフリーを推進するためには、高齢者を含めた大人への理解が必須であると考え。今回の講演会では全老人クラブ代表への告知はできなかった。今後は研修会や講演会に高齢者への参加を呼び掛けることが必要である。

エ 心のバリアフリー運営協議会の開催

（成果）

- 運営協議会の委員にインクルーシブ教育を研究している大学教授 藤井慶弘 氏を招いたことで、障がい者理解教育の最新の情報や推進するためのアドバイスを得ることができた。藤井氏からは、第三者の立場から、特別支援学校と小・中学校との微妙な考えや意識の違いを調整していただくこともあった。

（課題）

- △大学教授の日程に合わせた協議会の開催となることで、実際に企画運営している教職員の参加が難しくなった。
- △運営委員に当事者が入っていない中で「障がい者理解」を語ることに疑問を感じた。今後は、当事者や当事者の保護者も委員に含めることが必要と考える。

オ 心のバリアフリー障がい者理解学習リーフレットの作成

（成果）

- 学習ガイド作成の過程で、秋田県教育庁特別支援教育課、秋田県内特別支援学校、大仙市社会福祉課障がい者支援班、大仙市社会福祉協議会、秋田県障がい者スポーツ協会、秋田大学、秋田公立美術大学、秋田地方法務局大曲支局（人権担当）、県内障がい者理解教育先進校等、たくさんの関係機関から情報を得られた。
- 市内の小・中学校における聞き取り調査をする中で、現在の市における障がい者理解教育の実態について知ることができた。学習ガイドを市内全小・中学校に配布することで、各校の実態に合わせた障がい者理解教育の推進が図られることが予想される。

(課題)

△特別支援学校教職員及び保護者におけるアンケート結果では「心のバリアフリーという言葉聞いたことがない」と回答した教職員が16.7%、保護者が58.5%いることが分かった。拠点地区以外の教職員や保護者はさらに割合が高いことも想像できる。教育委員会としては、各研修会や学校訪問を通じて、「心のバリアフリー障がい者理解学習リーフレット」「心のバリアフリー障がい者理解啓発プログラム」の利用を勧めていく。また、学校通信及び学級通信等を利用し、各校における交流及び共同学習の内容を保護者等にも積極的に伝えていくことを話していくことが必要である。

#### カ 心のバリアフリー障がい者理解教育全体計画の作成

(成果)

○アンケート結果において、拠点校は「障がいのある人が身近に生活していることを知っている」「障がいのある人と自分との共通点について知っている」「障がいのある人と自分との違いについて知っている」の数値を高めた要因の一つとして、事業の前に障がい者理解教育全体計画の素案を作成し、「障がい者理解教育目標」と「目指す児童像」を視覚化・共有化したことが挙げられる。ねらいが明確化されたことで、児童も教師も体験だけでない活動ができたと考えられる。拠点小・中学校では、以前から交流及び共同学習を行ってきたものの、事業前のアンケート結果では、拠点校と拠点校以外の学校では差が見られなかったのは、障がい者理解教育全体計画の有無が大きいことを示していると思われる。拠点校と先進校との比較からも同様のことが言える。市教育委員会として、どの学校でも使用できるテンプレートを作成したことで、各校の実態に応じた障がい者理解教育の推進が図られることが期待できる。

(課題)

△今年度作成した障がい者理解教育全体計画は、新学習指導要領の総則に即して作成しているものの、この後の教科書の改訂や現在の社会情勢の変化によって、各項目の重点目標に関しては変更も考えられる。市教委が中心となって各校の協力を得ながら随時変更していきたい。

#### キ 心のバリアフリー障がい者理解啓発プログラムの作成

(成果)

○プログラムを作成するに当たり、同県他市の障がい者教育先進校における、障がい者理解授業を参観し参考にすることができた。(参観校：男鹿市立船川第一小学校 授業者：秋田県立きらり支援学校教育専門監 参観者：大仙市小学校通級指導教室担当者2名、大仙市中学校通級指導教室担当者1名、大仙市教育委員会特別支援教室担当指導主事1名、大曲支援学校地域支援部担当教諭1名)参観者は大仙市の教育支援委員も兼ねていることから、来年度以降は障がい者理解教育の出前授業担当者として各小・中学校での授業を行ってもらうことを考えている。実際の授業を参観したことで、参加者全員が授業のイメージをもつことができた。

○プログラム作成に対し、県内各特別支援学校の地域支援部担当の協力や参考資料をいただいたりすることができた。市の教育委員会と特別支援学校の連携が深まった。

(課題)

△拠点地区、拠点校以外の抽出小・中学校の保護者におけるアンケート結果において「障がいや障がいのある方について家庭で話題にしない理由」の第一位は、「障がいのある人が身近にいないから（各校約40%～約60%）」であった。しかし、アンケートを実施した全ての学校には特別支援学級児童が在籍しており、学校行事や交流及び共同学習等で特別支援学級の児童生徒と身近な関わりがあったはずである。話題にすると回答した保護者の内容を見ても、自校の特別支援学級児童生徒について触れていた回答は、ほぼ0であった。教育委員会として、研修会や学校訪問等でこの事実を伝えるとともに、これまで行っている通常学級の児童生徒と特別支援学級の児童生徒との交流及び共同学習が、児童生徒の心のバリアフリーを育むことをあらゆる場面で伝えていくことが必要である。また、特別支援学級担任及び特別支援教育コーディネーターが、各校の障がいのある児童生徒が心のバリアフリーを育むキーパーソンであると自覚する必要がある。

△障がいのある子どもの母親への取材や特別支援学校児童生徒の保護者アンケートから「かわいそう」に対して差別や偏見を強く感じていることが分かった。小・中学校のアンケートによると「かわいそう」と考えている割合は、障がい者理解学習の回数が少ないほど高かった。教育委員会として研修会や学校訪問等でこの事実を伝えるとともに、交流及び共同学習が児童生徒の心のバリアフリーを育むことをあらゆる場面で伝えていくことが必要である。

△拠点地区の大曲支援学校の児童生徒の理解を推進するための教育プログラムを市の教育委員会担当指導主事が作成したが、そのプログラムを各小・中学校の教諭が自由に使うことに対して、特別支援学校側の許可が下りなかった。理由は、使用する小・中学校によっては、写真や動画を使用した児童生徒の兄弟がいる可能性があり、偏見や差別の対象になるかもしれないということであった。地域の特別支援学校の理解推進のための障がい者理解学習は、授業を行う学級の児童生徒だけでなく、兄弟や親類への差別や偏見等も考慮する必要がある。よって、特別支援学校の地区小・中学校に対する理解促進については特別支援学校が主体になって行うことが望ましい。市教育委員会は、特別支援学校に対してセンター的機能を十分に発揮してもらうように積極的に働きかけるとともに心のバリアフリー推進のために協力していく必要がある。

(その他の成果)

○交流及び共同学習を6年間行った内小友小学校の卒業生4人(24歳～26歳)に取材することができた。「障がいのある人に偏見がなくなった。」「人に寛容になれた。」など障がいのある人への理解が深まったり、「自分よりも漢字が読める子に驚いた。」「世の中にはいろんな人がいる。」など障がいのある人の能力を素直に認めたり多様性に気付いたり、「言葉を使わなくても交流できる。」「人との接し方を学んだ。」など自分の価値を高めたり、交流及び共同学習の効果をさらに確認することができた。4人とも「小さい頃から交流するのがよい。」「一度も交流を嫌だと思ったことがない。」と答えており、1年生から全ての児童が継続した交流及び共同学習を経験

することが大事であると思われる。この卒業生達が親世代になった時には、さらに心のバリアフリーが推進されるのではないかと期待している。

○全校で交流及び共同学習を行った内小友小学校の学習記録と大曲西中学校の学習記録から、小学校1年生～中学生における、障がい者理解や他者理解の思考の段階をおおまかに読み取ることができた。小学校低学年は「シールがもらえてよかった。」「勝ててよかった。」など、他者をあまり意識せず自分中心に考えており、小学校中学年からは「優しくしてあげたい」「仲よくなれた」など、他者を考えた感想が増えていた。高学年になると「支援学校の先生に教えていただいて、反応を待ったら笑ってくれたり返事をしてくれたりしてうれしかった。」「自分たちが考えたことで喜んでくれてうれしかった。」など、他者に喜んでもらおうとする感想が増え、中学生では、「積極性のあるところを見習いたい。」「できないからと逃げるのではなく、こうすればできるのかも挑戦することが大切だと思った。」など、障がいのある人のよさに気付いたり、良さを生かしたりしようとする感想が増えている。このことから、低学年の交流及び共同学習の最初は、「自分が楽しい活動の中に障がいのある人もいる」という形がよいのではないかと考える。また、感想をもとにした発達段階については障がい者理解学習やプログラムに反映していきたい。

## 5. 普及活動実績

普及活動実施名	参加（校・人数）／配付枚数
心のバリアフリー講演会・座談会	250名 （市内外の小・中学校教職員、県内高等学校教職員、市内外の幼稚園・保育所・認定こども園教職員、市内学校生活支援員、福祉施設支援員、障がい者親の会会員、ロータリークラブ等団体会員、PTA連合会会員、母親委員、保護者、一般）
パラリンピアン講演会	200名 （大川西根小学校4～6年生児童・教職員、内小友小学校4～6年生児童・教職員、大曲西中学校1～3年生生徒・教職員、保護者、一般、教育委員会）
心のバリアフリー障がい者理解学習リーフレット	800枚

### 【普及状況・今後の展望】

(1) 域内の特別支援学校と通常の学校との間で行われる交流及び共同学習の実施率

・12校 37.5%

小学校は、9校。大曲小学校、大川西根小学校、花館小学校、角間川小学校、高梨小学校、横堀小学校は居住地校における交流及び共同学習との交流及び共同学習。神岡小学校は特別支援学級児童と特別支援学校児童との交流及び共同学習。内小友小学校、大川西根小学校は学校間における交流及び共同学習。

中学校は、4校。大曲中学校、中仙中学校、西仙北中学校、南外中学校は特別支援学級児童生徒と特別支援学校中学部1・2年生との交流及び共同学習。大曲西中学校は学

校間における交流及び共同学習。

(2) 交流及び共同学習における「合理的配慮」の実施率

・ 100%

(3) その他

【各小・中学校における交流及び共同学習の実施状況等】

(別紙「大仙市小・中学校における交流及び共同学習アンケート結果」参照)

6. 事業の概念図

時期	事業の内容
P 5月～	<ul style="list-style-type: none"><li>心のバリアフリー障がい者理解教育の全体計画の作成 (ねらいの確認・共有化)<ul style="list-style-type: none"><li>第1回心のバリアフリー運営協議会</li><li>心のバリアフリーアンケート内容の確認</li></ul></li></ul>
D 5月～1月	<ul style="list-style-type: none"><li>アンケートの実施とk集計(ねらいに関する実態把握)</li><li>先進校及び拠点地区以外の学校のアンケートの実施</li><li>交流及び共同学習の実施<ul style="list-style-type: none"><li>特別支援学校との交流及び共同学習の実施</li><li>車いすバスケットボール体験学習</li><li>パラリンピアン講演会</li><li>心のバリアフリー講演会・座談会</li></ul></li></ul>
C 12月～	<ul style="list-style-type: none"><li>各活動における感想等の集計</li><li>アンケートの実施と集計 (ねらいの達成度の確認、先進校・拠点地区以外の学校との比較)</li></ul>
A 2月～	<ul style="list-style-type: none"><li>成果と課題のまとめ</li><li>心のバリアフリー障がい者理解教育全体計画の修正</li><li>心のバリアフリー障がい者理解啓発プログラムの作成</li><li>心のバリアフリー障がい者理解学習リーフレットの作成</li><li>次年度の計画立案</li></ul>

担当者(所属・職名) 櫻田武(大仙市教育委員会・主幹兼指導主事)

連絡先

TEL 0187-63-1111 FAX 0187-63-7131

e-mail takeshi-sakurada14@city.daisen.akita.jp)